

## 戦後の花街芸の継承 —北野上七軒の「寿会」(ことぶきかい)の創生を中心に—

中原 逸郎(京都楓錦会)

花街(かがい)は、芸舞妓が舞踊等の芸と地元言葉による会話で顧客をもてなす場で、近年、岩手県盛岡市八幡町、秋田県秋田市川反(かわばた)等で地域創生につながる花街再建が試行されている。

戦後の京都は、進駐軍の米兵が闊歩し、聞き取りでは北野上七軒花街(京都市上京区、以下上七軒)でも見られ、祇園甲部(京都市東山区)の元舞妓は宴会に呼ばれると戦後政策の情報交換からか、公務員と外国人ばかりだったという。米国の報道陣も花街に興味を寄せ、昭和21年(1946)には既述した元舞妓を撮影し掲載した。当時ジルバ等西洋舞踊が流入し、この元舞妓も夢中になったという。

芸能は社会の変化に応じて変化し、花街の芸(芸能と同義)も社会的変化の中で変化してきた。本発表では、上七軒関係者の聞き取りも交え、戦後史の一端として花街の戦後復興期を捉えることを目標とする。そのため、後年「寿会」と名を変える上七軒の温習会の舞踊の演出を中心に、伝統芸を取り巻く社会環境の変化を捉える。

調査地の上七軒では、昭和24年(1949)には日本舞踊の温習会(おんしゅうかい)を再開した。温習会は「芸事等の総ざらいで、習った成果を発表する場」(大辞泉)で、日本舞踊では主に演じる場であった。温習とは学習した古典を温め直す、つまり復習の意で、日本舞踊では踊りのおさらい会は流派の師匠が指揮してきたが、上七軒は戦後復興期の温習会において演出家が指揮した点で特異であった。

上七軒の温習会は幕末から続くおどりの流れをくみ、戦後人々の生活の安定に連れて開催された。その復活は単なる古典芸能の温習には止まらなかった可能性がある。そのため、本発表では聞き取りを加え、後年「寿会」と称した温習会を、時代の要請に基づく文化的創生の視点から捉え直してみたい。

なお、本発表は本年9月に上海音楽学院(中華人民共和国)で行われた2017上海・第十二回中日音楽比較シンポジウムにおける筆者の発表内容を書き改めて実施する。